



# 東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター

## The Newsletter **CNEAS**

### 第 58 号

#### ● 目次 ●

巻頭言：課題群としての東北アジア	1
最近の研究会・シンポジウム等	2-4
東北アジア学術交流懇話会 定期公開講演会 すぐそのロシア“隣人の今”	2
公開講演会 よみがえる村田の歴史～江戸時代からのメッセージ～	3
共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」第1回研究会	4
共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成25年度第1回研究会	4
人事異動	5
新任教員紹介・新任スタッフ	5
客員教授紹介	6
受賞関連	7
センター関連出版物紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

## 巻頭言

### 課題群としての東北アジア

東北アジア研究センター長  
岡 洋樹

東北アジア研究センターが対象とするのは、ロシアのシベリア・極東、モンゴル、中国、朝鮮半島、日本から成る東北アジアである。地域というと、なんらかの文化的共通性を基礎に論じられることが多いが、東北アジアはそのような意味での地域とは言いがたい。むしろ東北アジア地域研究に求められるのは、上述の地域を視圏とすることによって見えて来る様々な課題を把握し、研究することである。そしてそのような課題設定は、近年確実に重要性を増している。北朝鮮問題が韓国・中国・ロシア・日本・モンゴルの関与抜きには議論できないことや、中国の発展とロシアのシベリア・極東開発の関わり、国境を越えた人と物の移動、中露の二大国に挟まれたモンゴルの安全保障問題、さらには国境をまたいで暮らす多様な民族とその文化変容の問題など、いずれも東洋研究と西洋研究といった既存の地域研究枠組みでは捉えることが難しい課題である。東北アジアの文化的多様性は、一見すると東北アジアを一つの地域とすることの難しさを示すのだが、逆にこの多様性が生み出す政治・経済・社会・文化の亀裂が生み出す課題群こそが、東北アジアを一つの地域として視野に収めた研究枠組みを要請する

のである。だから東北アジア研究とは、日頃異なる学界構造の中で暮らす研究者が出会い、異分野との対話を行う空間でなければならぬのである。近年のグローバル化は、東北アジア諸国の距離（感）を急速に縮めている。それに伴って、解決を要請される課題も日ごとに増えている。今こそ、東北アジアを個々の領域で研究する一方で、学際的な、あるいは領域横断的な研究態勢を構築することが要請されているのだと言えるだろう。東北アジア諸国の研究交流の進展が、このような東北アジアの研究を、現地研究者との協力で進める可能性が現実のものとなりつつあることも、東北アジア研究にとっての追い風である。東北大学は、近年ロシアとの交流をさまざまな分野で深めているが、東北アジア研究センターはこれを中国・韓国・モンゴルなどの研究者との交流と結びつけながら、そのミッションを遂行していくべきであろう。



最近の研究会・シンポジウム等

① 東北アジア学術交流懇話会 定期公開講演会

すぐそのロシア  
"隣人の今"

Neighboring Russia



会場の様子



横手慎二先生

この講演会は 2013 年 5 月 24 日に東北大学の東京分室で開催された。お話いただいたお二人の先生と講演題目は次の通りである。横手慎二先生（慶応義塾大学法学部）「ロシアの

異質性と世界」、本村眞澄先生（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）「変容する北東アジアのエネルギーフロー」。ともに日露外交やロシアの対外政策、ロシアのエネルギー問題について日本における第一人者であり、当日は非常に興味深いお話をうかがうことができた。

横手先生は、プーチン大統領の登場以来、活発にかわされるようになってきた、ロシア国家は異質であるとの議論を考察した。学会にも大きな影響を与えたアルフレッド・リーバーによる議論、すなわちロシア外交に影響を与えてきた 4 つの要因（経済的後進性、侵入しやすい国境、多民族・多文化社会、文化的疎隔）を最初に紹介した。次に史料が入手可能な 19 世紀の国際関係の中のロシア異質性論として 3 つのパターン（反動的体制、非ヨーロッパ、膨張国家）を論じ、最後に現代のロシアのエリートが西側の求めている民主主義化を拒絶する議論を紹介した。

モスクワ国家が拡大してロシアが成立して以来、ロシアは異質であるとの議論が西側で繰り返し論じられ、そこには一定のパターンを見ることができることが明らかにされ、現代のロシア異質論についても、自分たちのアジェンダを強制する西側に対して新興諸国とともに拒否反応を示すロシアに対してつけられたレッテルであるとする。確かに対イラク戦争の結末を見ても、単一の民主主義モデルは存在しないとするラブロフ外相の発言がある程度説得力を持つのは確かであると述べる一方で、横手先生はシュレーダー前ドイツ首相がバルト海のパイプライン「ノルドストリーム」（露から独への天然ガス）会長におさまってプーイングを浴びたように、人権侵害を軽視するロシアが反論できる余地はないとも強調した。サンクトペテルブルグで開催された最近の G20 会議では、シリア問題についてロシア提案

が評価されるなど、西側の議論にも分裂がみられるようになってきているのは興味深い。

本村先生は 1970 年代以降のソ連産天然ガスのパイプラインによる対欧州輸出の歴史を遡り、40 年間にわたって相互に利益をもたらしてきたことを強調する（相互確証抑制）。そして 2006 年、2009 年に勃発したロシアとウクライナ間の天然ガス紛争に関しては、国際的な天然ガス価格との比較からウクライナを狙い撃ちにした政治的な価格引き上げには当たらないことを説得的に示された。確かにウクライナに対しては諸外国と比較してもそれまで低価格に抑えられていた。日本にとって重要な東方におけるエネルギーフローについてもサハリン産のロシア原油の比重が拡大していること、東シベリアの原油、天然ガスのパイプラインによる東方への輸出も将来的に拡大が見込まれ、プーチン大統領の腹心たるセーチン・ロスネフチ社長が活発に動いていること、北極海経由で LNG の輸入も計画されていること、日本でもパイプラインを敷設することの有利さを強調された。

原発事故による汚染水の深刻な問題が懸念され、原発の再稼働について世論が割れている昨今、主として天然ガス輸入増大による貿易赤字の拡大は国富の流出を招き、エネルギー問題の克服は日本国民にとって死活的に重要な課題である。その切り札として、自然エネルギー、米国のシェールガス・石油と並んでロシアのエネルギー活用が選択肢として浮上するが、本村先生のお話はそれを考える上で格好の材料を提供していただいた。総じて資源国と消費国はウィン・ウィンの関係しかあり得ないとの立論だったが、3 月に訪露した中国の国家主席が東シベリアからのパイプラインの中国向け支線建設で合意したことは、ロシアだけでなくレアアース問題で日本を狙い撃ちした中国が絡んでくるため、日本への安定供給については一抹の不安を覚えざるをえないというのが率直な感想であった。当日はほぼ満員の盛況で、最後の質疑応答でも活発な意見交換がなされた。

(寺山恭輔)



本村眞澄先生

## ② 公開講演会

よみがえる村田の歴史  
～江戸時代からのメッセージ～

2013年6月29日(土)に、宮城県柴田郡村田町(道の駅「村田」歴史と蔵のふれあいの里村田町物産交流センター)にて、公開講演会「よみがえる村田の歴史～江戸時代からのメッセージ」を開催した。主催は、東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門・東北大学災害科学国際研究所・NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク(宮城資料ネット)・村田町教育委員会である。

本講演会は、村田町の旧家・山田家に所蔵されている古文書の調査をもとにしたものである。山田家の先祖は、16世紀後半の安土桃山時代に現在の福井県から蔵王町遠刈田に、そして後に村田町に移住し、酒造業などを開始した。いわば村田町の商業のバイオニア的存在である。同家には江戸時代に建造された店蔵など数棟の土蔵があったが、東日本大震災により一部が損壊した。所蔵品が整理された際、大量の古文書が確認されたため、宮城資料ネットや村田町により本格的な調査が実施されたのである。その結果、古文書には従来ほとんど知られていなかった江戸時代前期(17～18世紀)の村田町の歴史を解き明かす内容が含まれていることが明らかになった。貴重な歴史資料の存在を多くの人に知ってもらうと共に、今後の町づくりの1つのトピックとなることを期待し、専門家を招いての講演会を企画することとなった。当日のプログラムは以下の通りである。

## 開会の挨拶

平川新(上廣歴史資料学研究部門兼務教授、災害科学国際研究所所長)

## 講演

「村田町、生い立ちの頃—山田家文書の概観から—」

講師：佐藤大介(災害科学国際研究所准教授)

「山田家蔵書の世界—地域歴史資料としての価値—」

講師：小関悠一郎(千葉大学教育学部准教授)

## 閉会の挨拶

佐々木安彦(村田町歴史みらい館館長)

佐藤大介氏の講演では、刀剣鑑定や酒造業に出精し、仙台藩初代藩主・伊達政宗にも美酒を献上するなど、村田町における山田家の活動の礎を築いた同家初代・新五郎の軌跡が紹介された。また、仙台藩領内の土木事業に功績のあつ



佐藤氏の講演

た出入司・川村孫兵衛らに山田家が融資を行っていたこと、同家と江戸の豪商・三井家との間に紅花の取引関係があったことなどが、各種証文から明らかにされた。

小関悠一郎氏の講演は、山田家の蔵書から江戸時代の学問状況を明らかにするものであった。当時、山田家には刊本・写本を含めて約500部1200冊の蔵書があった。これは同時代の民間人の蔵書としてはかなり多い数字である。18世紀の同家の6代・須敬(すけい)は、仙台藩の儒学者・遊佐木斎(ゆさぼくさい)の門人であり、「神儒の書を尊信せざる者、吾が子孫に非ず」という教えが同家には伝えられてきた。講演では、蔵書目録をもとに、当時どのようなジャンルの本が読まれていたのかが詳細に示され、民衆の学問受容状況の一端が明らかにされた。

これまで、江戸時代の村田町の歴史は19世紀以降の紅花取引を中心に語られてきた。しかし、両講演からは、紅花商いととどまらない江戸時代前期以降の豊かな町の歴史状況が具体的に浮かび上がってきた。講演会には地元や仙台から約140名が来場し、質疑応答も活発に行われるなど、熱気あふれる雰囲気であった。山田家文書は地域の貴重な歴史遺産として今後も受け継がれていくべきであることを再認識させられると同時に、地域の歴史に対する人々の熱意を大切に、それをさらに良い方向に繋げられるよう、歴史を通じた地域連携事業を今後も積極的に進めていく必要があると実感させられた。(高橋陽一)



小関氏の講演



3 共同研究

# 東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用

## 第1回研究会

日時：2013年6月20日（木）18：30～20：00

会場：仙台市戦災復興記念館 4階第3会議室

本共同研究の第1回研究会は東北大学災害科学国際研究所教授の川島秀一氏に「津波碑・津波石」のタイトルで話題提供をいただいた。発表では、明治および昭和の三陸沖地震津波に関わる「津波碑」の分布と特徴を中心に、三重県や四国の津波碑や、津波で打ち上げられた「津波石」についても触れられた。また、津波碑には供養碑と記念碑があるが、その建立の時期や条件、目的によって立地や記載内容にいくつかのパターンがあることが示された。特に、昭和8年の津波後に東京朝日新聞社の義援金によって岩手県に建てられた津波碑の場合、津浪浸水線上の適当な場所に震災年月日時・死亡者数・流失戸数などを明記するよう指示された為、そこに記念・防災・供養・避難の際の目標といった多層的な意味が付与されることになった。一方で、供養碑と記念碑に性格的に重なり合う部分があることや、津波碑と津波石との関連についても指摘された。

この度の発表で紹介された諸事例は、ある一回的な歴史

的出来事が、石碑という「形」を与えられることによって、どのように集合的記憶の拠り所となり、民俗文化のなかに居場所を得ていくのかを考える上で非常に興味深いものであった。また、様々なメディアを介して津波の記憶と記録が伝えられるこの度の震災とは対比的に、かつては津波碑が、津波という突発的な自然現象の記録を時空間を越えて伝えていくためのメディアとしても特別な意味をもっていたことを改めて感じさせられた。（滝澤克彦）



明和の津波石の前で踊る女性たち（宮古島のナーバイ、2013.4.13 発表者撮影）

4 共同研究

# 近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究

## 平成25年度第1回研究会



会場風景

本共同研究は、17世紀以後のモンゴルなど内陸アジアの遊牧民社会を対象とした歴史的研究を行うものである。遊牧民社会の歴史的研究の難しさは、遊牧民自身が残した史料の少なさに起因するが、17世紀以後については、文書史料など膨大な史料が利用可能である。本共同研究は、文書史料と現地調査によって、近代以前の遊牧民社会の解明を目指す。6月1日に東北大学大学院文学研究科中会議室を会場に開催された今年度第一回研究会では、以下の講演・報告が行われた。ライハンスレン・アルタンザヤ氏（モンゴル国立教育大学）の講演「ボグド・ハーン制モンゴル国のノヤン・ホトクトのシャビ旗」は、1911年に独立したボグド・ハーン政権期のモンゴルで活躍したジャーラマ・ダンビジャンツァンが、政府からシャビ旗を与えられていたことを論じたもの。中村篤志氏（山形大学人文学部）の研究発表「モンゴル王公の年班・行走－光緒9年乾清門行走

日記の分析から一」は、氏が近年研究を進めている清末の外モンゴルの一王公の北京宮廷での勤務時の日記について論じたもの。佐藤憲行氏（東北大学東北アジア研究センター）「清代モンゴル・ハルハにおける耕作地について」は、モンゴル国立中央アルヒーフ所蔵史料を用いた外モンゴルにおける漢人の耕作地に関する報告。ブレンソド氏（東北大学大学院環境科学研究科）「清代内モンゴル・ハラチン地域におけるタブナンとソムの関係について」は、内モンゴル・ハラチン旗における貴族層タブナンと佐領の統属関係に関する研究であった。最後に活動報告として、岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）「国際シンポジウム『清朝とモンゴル人』開催報告」は、昨年度ウランバートルで、東北大学東北アジア研究センター・モンゴル科学アカデミー歴史研究所・中国内モンゴル師範大学共催で開催された国際シンポジウムの内容報告であった。（岡洋樹）

## 人事異動

2013年6月～9月

9月1日付で駒木野智寛氏が資源環境科学研究分野助手に採用されました。



●助手

## 駒木野 智寛

2013年9月に東北アジア研究センター資源環境科学研究分野の佐藤研究室に助手として着任したコマギノトモヒロです。

私はこれまで、縄文時代前・中期の100棟以上の竪穴住居址を検出した岩手県普代村の力持（ちからもち）遺跡などの考古遺跡において、発掘調査と室内作業を主導してきました。

研究活動のきっかけは、力持遺跡で発掘調査中に、「やませ」の発生により気温が急激に低下するのを経験したことで、気候変動による遺跡の立地と竪穴住居の形態の変化に興味を持ち、大学院では地理情報システム（GIS）を用いて考古地理学を研究してきました。

2011年3月の東日本大震災以降は三陸沿岸を中心に歴史地震と被災遺跡の関係について明らかにしたいと思い、博物館学芸員の方と共同で現地調査を進めています。

現在は、遺跡の発掘調査報告書に記載

された竪穴住居址の実測図を見ながら、集落遺跡に生活した人々が厳冬期の卓越風・地震・津波の襲来、火山噴火に伴う火山灰の降下などの環境変動や巨大災害にどのように対処したのかを想像し、その痕跡を読み取るべく研究しています。

佐藤研究室では、非開削で地下の様子を知ることができる計測技術の地中レーダ（GPR）を用いて遺跡探査をしており、宮崎県の西都原古墳群をはじめとして数多くの実績があります。

東日本大震災発生以降、この地中レーダ（GPR）による計測技術を活かして被災者が仮設住宅から移転する際の高台調査に実用されており、復興の加速に貢献しています。

私は、考古遺跡の発掘調査経験と地理情報システム（GIS）を用いた集落遺跡の研究経験を活かして、被災地遺跡において地中レーダ（GPR）による計測に取り組みます。皆様、宜しく願い致します。

新任教員紹介



●教育研究支援者

## ツオグバダラフ・ガンツェツエグ

2013年7月1日から東北大学東北アジア研究センターに教育研究支援者として着任しました。モンゴル国でウランバートル大学を卒業した後2004年から2006年に昭和女子大学文学研究科で博士前期課程を修了しました。一回、母国のモンゴルに戻ってから2008年に昭和女子大学文学研究科博士後期課程に入学して、2011年に満期退学をしました。2013年に昭和女子大学で研究員として在籍してから、東北大学に異動、現在に至ります。

私の主な専門は言語学・日本語教育です。モンゴル語の記述的な研究ををテーマとして、主に、モンゴル語の使役文と受身文の研究をしています。

修士課程ではモンゴルにおける日本語教育、特にモンゴル人学習者の日本語でのコミュニケーション能力を上達させる

教授法の研究をしていました。博士課程で日本語とモンゴル語の対象研究、モンゴル語の使役文と受身文の研究をしてきました。モンゴル語では使役の形式を用いて受身を表す場合があります。なぜ、モンゴル語で使役の形式を用いて受身を表すのか、そうした言語のとくちょうにはどのような言語的・文化的な背景があるのかといったことを研究しています。

東北アジア研究センターではモンゴル語の辞書の研究に関わり、主にモンゴル国で試用されているキリル文字で書かれた辞書の入力を担当しています。

東北大学の刺激の環境で研究できることをありがたく思っています。また、センターの皆さまと協力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

新任スタッフ紹介

客員教授紹介



●教授  
巴雅爾(バヤル)

巴雅爾(バヤル)氏は、中国内モンゴル師範大学旅游学院教授・副院長で、モンゴル民俗学を専門としている。旅游学院は、内モンゴルにおける観光に関わる専門技術の教育を行うことを目的として設立された学院で、傘下にモンゴルの歴史・文化を研究する蒙古歴史文化研究所を有している。東北アジア研究センターは、2011年に旅游学院と部局間学術交流協定を締結し、研究交流を行っており、今回バヤル教授は、岡洋樹教授を受入教員として来仙された。

バヤル教授が研究対象としているのはモンゴルの民俗文化である。遊牧民であるモンゴル人は、独特の精神文化を有しており、近年内モンゴルでは、モンゴル文化を資源とした観光開発が進められている。旅游学院の研究者の課題は、観光におけるモンゴル文化の正しい利用なのである。バヤル教授は、モンゴル民俗学の立場から、遊牧民の馬に関わる文化の研究として『蒙古民間文学基本体裁与馬

形象文化学研究』(モンゴル口承文芸の基本的類型と馬の形象文化の研究)(蒙文。呼和浩特:内蒙古教育出版社、2005年)や『蒙古馬文化研究』(呼和浩特:内蒙古人民出版社、2001年)があるほか、オボーと呼ばれる石塚による伝統的な祭祀文化に関する著作を準備している。またモンゴル文化の概論として楊巴雅爾、扎格爾、巴特爾共著『蒙古游牧文化溯源』(モンゴル遊牧文化の淵源)(呼和浩特:内蒙古教育出版社、2002年)など、多くの著書・論文がある。

なお、教授は論文を楊バヤルの名で発表されているが、姓の「楊」は、教授のモンゴル語の氏族名が「羊飼い」を意味するホニチンであることから、「羊」と音通の「楊」の文字を用いているとのことである。今後、教授が専門とするモンゴル研究はもちろんのこと、学際的な観光研究の面でも日本との研究交流の活性化が期待される。(岡洋樹)



●教授  
潘建国

潘建国教授は、現在、北京大学中文系で教鞭をとるとともに、明代中国小説の研究を行なっています。

出身は中国の江蘇省常熟市で、1996年に上海師範大学人文学院の博士課程を修了して、文学博士の学位を取得しています。出身地の常熟は古来より作物が豊かな地域であり、文人も多数輩出しています。中国の人々にとって、文学に携わり、自然の風光を愛でて、美味しいものをいただくことは、一種のステータスシンボルでした。潘先生は美術品を愛し、学問を専門とすることから、正に江南の伝統的の文人を代表する方と言えましょう。

潘先生は、これまで、『燕山外史』や『五鼠鬧東京』などの口語体古典小説について、テキスト面から実証的研究を進めるとともに、『世説新語』、『西陽雜俎』などの文言系小説の版本テキスト研究、或は、明代の出版元に雇われたた文人一鄧志謨など一の研究をし、明代社会と文人の創

作活動について明らかにして来ました。また、清末の石印本の形で出版された小説研究も進め、明代から清代の文学史の流れも追究されています。

中国文学の他、日本の江戸漢学者にも興味を持たれ、儒学者の手翰の蒐集も行なっています。

若手研究者の時に中国の学界でその活躍が目され、2006年に北京大学中文系へ転出しました。現在では、中国社会科学院文学研究所の雑誌編集顧問や北京大学の国際中国学研究育成プロジェクトチームの委員なども兼任していて、国内・国外の若手研究者の育成や交流事業に携わっています。東北大学では、附属図書館所蔵宋元明版、或は、宮城県図書館の伊達文庫本を調査するなどし、版本研究を進めて行くことを計画しています。今後、東北アジア研究センターと北京大学との間をとり持つ役割を果たしていただけたと思います。(磯部彰)



東北アジア研究センター報告 第 8 号

『身体的実践としての  
シャマニズム』

菊谷竜太・滝澤克彦編 2013年3月



本書は、2011年2月21日に東北大学マルチメディア教育研究棟で行われた東北シャマニズム研究会国際シンポジウム「身体的実践としてのシャマニズム」における成果を中心に、同研究会が過去において蓄積してきた研究会の成果を纏めたものである。本書に収められたシンポジウムを含む研究会活動の一部は、東北アジア研究センターの公募共同研究(2010年度)として行われた。

東北アジアの社会や文化を読み解く上で、シャマニズムは極めて重要な位置を占めていると考えられる。本研究では、インド・チベット学、宗教学、文化人類学、日本思想史、中国文学など多彩な研究分野と対象地域をもつ研究者たちが集まり、シャマニズムの特質を多面的に分析することが目指されたが、タイトルにも示されている通り、特に身体的実践を中心とした具体的な職能・技術に主眼が置かれている。

本書では、まずシャマニズムと隣接する宗教現象との歴史的影響関係について栗田英彦(東北大学)、菊谷竜太(東

北大学)、大川真(吉野作造記念館)によって検証され、さらに身体的実践としてのシャマニズムを論じるための理論整理や概念規定が佐藤慎太郎(東北大学)、高戸聰(東北大学)によってなされる。その上で、シャマニズムの身体的実践について、山田仁史(東北大学)、佐藤憲昭(駒澤大学)、R・N・アマヨン(フランス高等研究実習院)によって具体的な分析が行われている。

(滝澤克彦)

『東北大学東北アジア研究センター  
活動報告 2012』

本センターの2012年度の『活動報告 2012』が6月30日に出版されました。A4判278頁の活動報告は、本センターの年間行事、組織運営活動、共同研究、個人研究、成果公開、等すべての活動をカバーするものです。主な内容は次の通りです：

2012年度行事表、総合的自己評価、組織運営活動、上廣歴史資料学研究部門の設置とその活動、研究活動(プロジェクト研究ユニット、共同研究、公募共同研究、学術協定、研究成果公開)、教員の研究活動、他。

## 受賞

## ●佐々木聡専門研究員が、平成24年度笹川科学研究奨励賞を受賞

本センター佐々木聡専門研究員が、笹川科学研究助成の奨励賞を受賞し、2013年4月26日には受賞研究発表会が東京で開催されました。今回の受賞対象となった研究課題とその概要は次の通りです。

研究課題：『開元占経』の基礎的研究—日本・中国・台湾所蔵資料の悉皆調査を中心に—

研究概要：本研究では、唐王朝の時代に天文暦学・占学の集大成として編纂された『開元占経』について、伝本の調査・研究を行い、思想背景を含めた資料の特質を明らかにした。



受賞研究発表会における佐々木研究員の報告

## ●佐藤源之教授が物理探査学会功労者表彰を受賞

2013年6月3日、本センターの佐藤源之教授が、物理探査学会功労者表彰を受けました。長年の学会への貢献に対するものです。

## ●石渡明教授の共著論文が、国際学術誌「Island Arc」2013年最多ダウンロード賞を受賞

本センターの石渡明教授が、2011年に国際学術誌「Island Arc」に共著で発表した論文が、2013年最多ダウンロード賞を受賞しました。第一著者のAyalew氏は日本学術振興会の研究員として、2010年と2013年に東北アジア研究センターに滞在し、研究しました。(『2013年最多ダウンロード賞』は、2007年～2011年に出版された論文のうち、2012年に最もダウンロードされた論文に対しWiley-Blackwellより与えられるものです。)

受賞論文：Ayalew and Ishiwatari (2011) "Comparison of rhyolites from continental rift, continental arc and oceanic island arc: Implication for the mechanism of silicic magma generation". (Island Arc, Vol.20, p. 78-93)

活動  
風景

## 植民地残滓から文化遺産へ：韓国に残る日本植民地建築物の行方

東北アジア研究センター助教 金 賢貞

日朝修好条規 (1876) によって朝鮮半島内の釜山(1876)、元山(1880)、仁川(1883)が次々と開港した。以後も木浦・鎮南浦(1897)、群山(1898)などの開港が相次ぎ、港町は近代都市化した。計画的に開発された街には銀行、税関、裁判所などが設置され、今も当時の建物が残る。このような開港期・植民地期の建築物は、1945年の朝鮮半島の独立後真っ先に取り壊された神社仏閣と違い、戦後も多くが再利用された。例えば、全羅北道群山市には、「旧日本第十八銀行群山支店」(1907)、「旧群山税関本館」(1908)、「旧朝鮮銀行群山支店」(1909)などの建築物が残存するが、戦後旧日本第十八銀行群山支店は米穀倉庫、旧朝鮮銀行群山支店は韓一銀行、旧群山税関本館はそのまま群山税関に使われた。ただ、旧朝鮮銀行群山支店のように、数回の売却で結婚式場やナイトクラブなどに用いられた挙句、旧都心の空洞化に伴って目障りな空き家に化したものが多い。

韓国に残る開港期・植民地期建築物は、日本の精神・植民地支配の象徴性と、朝鮮戦争の混乱や財政窮乏のなかで見出された活用性という判断基準によって区別され、「すぐ破壊」か「残存」かが決められた。群山のような地方都市には、地元住民から「凶物」といわれながら今なお残存するものが少なくない。このように放置されつつあった開港期・植民地期の建物に大きな変化が生じた。これらを「近代文化遺産」に位置づけし、積極的な保存・活用を促す登録文化財制度(2001)の成立だ。筆者は既にこの制度成立の背景や歴史社会的コンテキストや社会文化的意味について論じており、今はこのようなナショナルな制度がローカルなコンテキストのなかでどう展開するのか、ガバナンスの視点から調査している。

朝鮮半島の東端に位置する慶尚北道浦項市南区九龍浦邑は総面積 45.02km<sup>2</sup>、28 行政里 / 10 法定里に 4,989 世帯、9,838 人が住んでいる。特に開港期・植民地期建築物が集中する長安里と龍珠里を中心に、2011 年 4 月から現在まで「九龍浦近代文化歴史通り」事業が進行している(写真 1)。九龍浦は仁川や群山のような開港場ではなく、日本人移住漁村として開拓された。1902 年に山口県豊浦郡のタイ縄漁船が来航してから 1910 年代にかけて主に香川県の漁民が移り



(写真 1) 「九龍浦近代文化歴史通り」入口

住み始め、道路や街区が整備され、役所や警察署なども設置され、1920 年代後半には日本人移住世帯が 120 戸を超えた。さらに、防波堤と埠頭が築造(1923~26)され、サワラ、ブリなどの漁業と運搬業で東海岸の重要漁港の一つとして栄えた。しかし、韓国の高度経済成長期を経るなかで漁獲量が激減し、さらに、教育や就職のために浦項市内などの都市部へ人口が流出し、経済は低迷している。そこで登場したのが、九龍浦の名物「グアメギ」(さんまの干し物)などの水産特産品と、日本人移住漁村というローカルな歴史を活かすまちづくりだ。

九龍浦市内の約 30 棟の日本家屋—植民地建築物—や、旧九龍浦神社のあった九龍浦公園(写真 2)、日本町通りの整備や近代歴史館の建設に約 7 億 9 千万円を投じるこのまちづくり事業は、観光客の増加やマスメディアの注目から見ると確かに功を奏している。



(写真 2) 九龍浦神社に建立された「九龍浦龍王堂」

90 年代末以降、韓国では開港期・植民地期建築物に対する積極的な価値づけと保存・活用が進んだ。このようなナショナル・レベルでの政策的変化は多くの地方自治体のまちづくりにも影響している。しかし、このようなまちづくり、例えば、九龍浦の事例のなかで、住民・市民との真の協働が見出せるかはまだ不明だ。筆者がこのガバナンスのあり方に焦点を当てる理由は、もし、九龍浦近代文化歴史通り事業がトップダウン式で行われているなら、現代韓国人にとって最も敏感な「近代認識」の問題が多声性に基づく開かれたテーマではなく、国家イデオロギーに左右される閉ざされた重荷でしかないという 20 世紀以前の状況と変わらないことの証左と理解できるからだ。今年 8 月の調査では、拓殖大教授呉善花氏に対する親日派批判が韓国に広がり、九龍浦での調査は難航した。韓国人とはいえ、日本の国立大学に勤める筆者が九龍浦で何を調べ、日本に伝えようとするのか警戒されたからだ。韓国で「日本」「近代」「植民地」は依然として政治的な言い争いに収斂されたりしている。植民地の残滓とされた建築物を活かすローカルなまちづくりの実践がどのような変化をもたらすか、今後も注目していきたい。

編  
集  
後  
記

東北アジア研究センターの入っている川北合同研究棟が東日本大震災後の補修・改修を完了したのは震災後 2 年半以上を経た 8 月 23 日でした。私の研究室も震災直後から、附属図書館→プレハブ棟→文学部棟 2 階→文学部棟 6 階と移転を繰り返し、9 月初めに 2 年半ぶりに元の研究室に戻ることができました。本号の入稿はプレハブさくら棟から事務室の復帰が行われる前日の 9 月 19 日でした。本号が発行される 10 月末には、震災後初めて合同棟の会議室でセンター会議(教員会議)が開催されます。復帰を祝し、再興を誓いたいと思います。(栗林 均)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第 58 号 2013 年 10 月 31 日発行

発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番地 東北大学東北アジア研究センター  
PHONE 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

